

土偶資料を例とした資料情報化研究(1)

—コンセプトと研究経緯、その課題—

八重樫純樹

小林達雄

-
- | | |
|-------------|--------------------|
| 1. はじめに | 4. データ設計と収集データの諸問題 |
| 2. 予備研究 | 5. データの形成過程 |
| 3. 実証試験研究活動 | 6. まとめ |
-

論文要旨

情報化の方法は多くの分野に普遍してきており、すでに経済、運輸、その他多くの分野で社会的活動の基幹となりつつある。歴史的資料に関する諸分野においてもここ十数年、研究を含め、これらの活動が行われてきている。しかし、これら的情報化方法論の確立、およびこれら分野において一般的な位置づけがなされたとはいがたい状況である。しかし、社会的に歴史系資料学術情報の整備、また、情報機器の一般的普及にともない、これらの現在的必要性は強く認識されつつある。特に考古学資料は発掘事業により全国各地で行われており、資料の累積は増加する一方であるが、その情報管理と情報利用の問題がまさに現在的課題となっている状況である。これは、博物館資料、文書資料においてもその程度の差異はある、同様な状況といえるのではなかろうか。

この大きな課題にとり、基本的に重要なことは情報形成方法論の確立であるが、極めて広い分野・対象であり、一般的確立は極めて困難であることは明白である。このためにはいくつかの例をもとに、試験的研究を行いつつ、問題を解決してゆく方法によらざるをえない。

本論はこれらの視点から、歴史的資料情報化方法論に関する試験的実証研究活動として、縄文時代土偶を例として行っている研究について示すものである。本研究の基本コンセプトは資料データの収集に終始せず、学術情報の生成・整理を行いつつ情報化を進めることである。研究活動はまだ経過の途上であるが、情報集成活動の基本段階をへてきており、ここでは、活動の基本コンセプト、その実現方法、経緯の過程を示しつつ、歴史系資料情報化に関する問題点の抽出およびそれらの解決方法、今後の課題と方向性について示すものである。